

日々新たにされる必要性

2006. 7. 23 (日)
西軽井沢福音センターにて
ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

コリント人への手紙・第二 4章1節から18節

こういうわけで、私たちは、あわれみを受けてこの務めに任じられているのですから、勇気を失うことなく、恥ずべき隠された事を捨て、悪巧みに歩まず、神のことは曲げず、真理を明らかにし、神の御前で自分自身をすべての人の良心に推薦しています。それでもなお私たちの福音におおいが掛かっているとしたら、それは、滅びる人々のばあいに、おおいが掛かっているのです。そのばあい、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。私たちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝えます。私たち自身は、イエスのために、あなたがたに仕えるしもべなのです。「光が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。私たちは、この宝を、土の器の中に入れていたのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。こうして、死は私たちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのです。「私は信じた。それゆえに語った。」と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っている私たちも、信じているゆえに語るのです。それは、主イエスをよみがえらせた方が、私たちをもイエスとともによみがえらせ、あなたがたといっしょに御前に立たせてくださることを知っているからです。すべてのことはあなたがたのためであり、それは、恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現われるようになるためです。ですから、私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

今読んでいただきました箇所は、使徒パウロ自身の告白、証しだけではなく、初代教会

の兄弟姉妹の、勝利の生活の秘訣についての箇所ではないかと思います。『日々新たにされる必要性』という題をつけたいと思います。

過ぎ去ったことは終わってしまい、明日のことはまだ来ていません。けれど今日のために私たちが必要としているのは、「新たにされること」ではないでしょうか。

イエス様を信じる者の中に、二種類あるのではないのでしょうか。即ち、敗北者たちと勝利者たちです。大切なことは、日々、主によって「新たにされる」ことです。

確かに、イエス様を信じている全ての兄弟姉妹は、遅かれ早かれ自分の信仰生活の妨げとなるものは、実は自分の周りの環境や人間にあるのではなく、自分の心のうちにあるのだということに気付かされます。

なぜ、多くの兄弟姉妹は霊的に進歩しないのでしょうか。それは自分の生活の支配者がイエス様ではなく、「自我」であるからです。

私たちのうちには、二つの「相逆らういのち」があります。御霊によって新しく生まれた兄弟姉妹は、永遠のいのちを与えられていますが、生まれながらのいのちはこの新しく与えられた主のいのちが、外に出ないように覆い隠そうと働きます。

今読んでいただきましたコリント第二の手紙4章では、生まれながらのいのちを「外なる人」と呼び、主のいのちを「内なる人」と呼んでいます。16節をもう一度読みます。

コリント人への手紙・第二 4章16節

ですから、私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

この、「外なる人をもってしては、どうしても主に喜ばれる生活をする事が出来ない」という体験を、やがてしなければならぬ時がやって来るはずで

いつも同じ失敗をし、いつも同じ罪を犯します。これを繰り返して、ついに自らに絶望してしまった経験をお持ちでしょうか。この経験は、もし、私たちが霊的に前進し、実を結びたいと心から願うなら、どうしても体験しなければならないことです。どんなに熱心でも、どんなに一生懸命祈っても、一度この霊的破産を通されなければなりません。

今朝は、短く三つの点を挙げて一緒に考えたいと思います。

1. 「外なる人」と「内なる人」とは、どういうものなのか。
2. 死によって実を結ぶことができる。
3. 壊された器となる必要性。

1. 「外なる人」と「内なる人」について、聖書はまずいろいろなことを記しています。

例えば、ローマ書7章、多くの人たちの読む箇所です。7章は全部で25節あります。その25節の間に、私、私、私ということばが20回も出てきます。このような霊的状态ですと、実を結ぶことも、壊された器となることもできません。しかしこの言葉は、パウロの、信仰者としてまたイエス様に奉仕する者としての告白です。

ローマ人への手紙 7章22節

すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、

「内なる人」は、「主イエス様」と考えてもよいでしょう。主の救いにあずかったパウロは、ここで、何とかしてイエス様のみこころにかなった生活をしようと努めています。

パウロはこのローマ書の中で、「私の肉のうちに良いものは住んでいないことが分かった。それは経験によって示されるようになった。けれども、イエス様は勝利者である」と最後に言うことができたのです。

このパウロはまた、エペソという町に住んでいる人たちに、次のように書いたのです。
エペソ人への手紙 3章16節

どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。

ここでも、「内なる人」ということばが出てきます。

パウロはここで、エペソの信者に次のように書き送っています。即ち、エペソにいる、愛する兄弟姉妹に対して、「あなたがたはすでに救われているのですから、あなたがたの内なる人はさらに強められなければならない」と語っています。

そして前に読みましたコリント第二の手紙4章16節にも、やはり「外なる人」、また「内なる人」という表現が出てきます。

コリント人への手紙・第二 4章16節

私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

ここでは、パウロは、コリントにいる兄弟姉妹に、内なる人は日ごとに新しくされ、日ごとに上から新しい力を受けなければならないと述べています。

今まで挙げたみことばを読んでも分かりますように、救いにあずかった人たちには、「内なる人」と「外なる人」のあることが聖書には記されています。

聖書で言う「外なる人」は「自我」のいのちであり、「内なる人」は主なる神によって新しく与えられた「主のいのち」であり、それは「内住のイエス様」です。

バプテスマのヨハネは、「彼は必ず栄え、私は衰えなければなりません」。「あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません」と言っています。ヨハネが言った「彼」とは、「内なる人」、即ち「主のいのち」であり、「我」とは「外なる人」、即ち「自我」のいのちのことなのです。

私たちが主に仕え霊的に前進しようと思うなら、「内なる人」、即ち内に住んでおられる主イエス様が、私たちのうちで自由にお働きになれなければなりません。内なる人が、外なる人によって縛られていては、実を結ぶ奉仕はできません。

内なる人、うちに住んでおられる主イエス様は、私たちのうちで現実的に主となられ、支配者となりたく思っておられますし、また、イエス様は当然そうされるべきお方です。私たちのうちにイエス様が支配者となっておられることが、一番大切ではないでしょうか。

私たちの内なる人は、時々、牢屋に入ったように縛られてしまいますが、自由にされなければなりません。私たちのうちに住んでおられるイエス様が、私たちを自由に支配なさるその度合いにしたがって、私たちはイエス様のために役に立つ者となり、主の目に尊い者となるのです。

外なる人、自我のいのちを満足させようと努める人もたくさんいます。この世は、自我のいのちを満足させるために、全てのものを備えています。大部分の映画、テレビ番組、娯楽雑誌は、人間の外なる人を満足させるために作られています。主イエス様の救いにあずかった私たちは、内なる人を養うために何をしていますでしょうか。

イエス様は、「人はパンだけで生きるものではなく、主なる神の口から出る一つ一つのことばによって生きる」と言われたのです。イエス様ご自身も、みことばによって生きておいでになられたお方です。

私たちは、本当に主のみ口から出ることばによって生きているでしょうか。ドロップしたキリスト者を見ると、悲しいことですが、主のみことばをいただいても、みことばに生かされていかなかったために、信仰の戦いから落ちてしまったことがわかります。

ただ聖書を読むだけではなく、もっとよくイエス様を知ろうと心掛けて、聖書の中にイエス様を求めようとしない者は、次第に霊的にかたわになってしまいます。正しく聖書を学び、正しく祈りをしないキリスト者は、同じところにとどまったままです。私たちは、内なる人のために何をしていますでしょうか。

私たちもパウロのように、「外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく」と言えるなら、幸いです。

2. 死によって実を結ぶことの大切さについて、一緒に考えたいと思います。

一番適切な箇所は、ヨハネ伝の12章24節、25節ではないかと思えます。

ヨハネの福音書 12章24節、25節

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみかたです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。」

一粒の麦の中にはいのちがあります。けれど、そのいのちは、堅い殻によってしっかりと包まれています。いのちが外に現われるためには、堅い殻が破られなければなりません。殻の中にあるいのちが問題なのではなく、殻を破っていのちが現われるか否かが問題です。

麦の殻は、私たちの外なる人、自分のいのち、自我のいのちを表わし、一粒の麦の殻の中にあるいのちは、内なる人、即ち神のいのちであり、イエス様ご自身であることを意味します。

内なる人、つまり主のいのちが自由にされるには、外なる人即ち自我のいのちが小さくされなければなりません。主イエス様は盛んになり、私は衰えなければなりません。

何と多くの人たちが、ただ「自我」のいのちだけしか持っていないことでしょうか。主のいのちについては何も知りません。イエス様に出会った人たちだけが、永遠のいのちを持っています。イエス様の弟子であるヨハネは、その第一の手紙5章12節に、次のように書き記したのです。

ヨハネの手紙・第一 5章12節

御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。

存在しているだけです。多くの方は器だけを見、大切にします。即ち、外なる人だけを見ているのですが、私たちは、器の中に入っているナルドの香りを尊びたいものです。

兄弟姉妹の中にも、二つの種類があります。救われた全てのキリスト者は、イエス様をうちに宿し、永遠のいのちを持っていますが、ある人は内なるイエス様が押し潰されてしまっ外に現われず、またある人は主が心のうちを自由に支配なされていることが外に現われています。

ですからキリスト者の問題は、いかにして永遠のいのちを受け取るかではなく、すでにある永遠のいのちが、いかにして私たちのうちで自由を持つかということです。救いにあずかった人たちの内なる人が外に現われて初めて、ほかの人たちに祝福をもたらしていくことができるのです。

ところで、多くの実を結ぶには、外なる人が死ななければなりません。一粒の麦が死ぬためには、まず地に蒔かれ、土の中に埋められ、全く一人ぼっちになります。光が見えません。そして、外の殻が腐って役に立たなくなってしまう。

けれども、このようにして死にきるなら、私たちもパウロと同じような経験を持つようになります。

コリント人への手紙・第二 4章16節

私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

コリント人への手紙・第二 4章11節

私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。

3. 最後に、第三番目の点について、ちょっと考えたいと思います。

「壊される器」についてです。二、三箇所読んでみましょう。

マルコの福音書 14章3節、4節

イエスがベタニヤで、らい病人シモンのおられたとき、食卓に着いておられると、ひとりの女が、純粋で、非常に高価なナルド油のはいった石膏のつぼを持って来て、そのつぼを割り、イエスの頭に注いだ。すると、何人かの者が憤慨して互いに言った。「何のために、香油をこんなにむだにしたのか。」

「もったいない」と彼らは思いました。イエス様の価値を知らなければ当然です。

ヨハネの福音書 12章3節

マリヤは、非常に高価な、純粋なナルドの香油三百グラムを取って、イエスの足に塗り、彼女の髪の毛でイエスの足をぬぐった。家は香油のかおりでいっぱいになった。

それから前に読みました、コリント第二の手紙2章14節です。

コリント人への手紙・第二 2章14節

しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。

マリヤは、価の高い匂い油を持っていました。彼女の全財産だったでしょう。この香り高いナルドの香油の香りが家中に満ちる前に、まず匂い油の入った器が壊されなければなりませんでした。もし器が壊されなければ、香り高いナルドの油は匂わなかったでしょう。

多くのキリスト者は、香油をしっかりとしまったまま信仰生活を送っているようなものではないでしょうか。イエス様を受け容れ、永遠のいのちを与えられています、いのちを外に現わしていくことをしません。そういう人たちについて、パウロはテモテに書いたのです。

テモテへの手紙・第二 3章5節

見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。

多くの兄弟姉妹の足りないところは、いったい何でしょうか。

中身よりも器を大切にしています。兄弟姉妹たちは、熱心であればそれで良いと思ひ、それが肉の力であるかどうかを見分けず、またこの世の教育を問題にします。そして彼らは器だけを見、外なる人だけを見ています。けれど、私たちは器の中に入っているナルドの香りを尊びたいものです。器は隠れ、ただ、内住したもうイエス様のみが現わされていきたいものです。

私たちは、確かに土の器のような者で、内なる人はイエス様ご自身です。生まれつきの賜物や能力は、主のご支配の下になければ本当は何の役にも立たないものです。そのためには、まず砕かれることが大切です。私たち自身は消えてなくなってもよいのです。ただ、うちに住んでおられるイエス様が、私たちを通して現わされていくことが大切なのです。

主の御霊は、休みなく私たちに働きかけておられます。御霊は私たちを導いて、私たちが自我に死にきり、砕かれきって、ただイエス様の御栄えのためにのみ、主の道具として用いられるように導いておられます。

外なる人は破れなければなりません。殻が砕かれなければなりません。なぜなら、「死」なくして実を結ぶことはなく、「霊的破産」なくして、いのちと祝福をもたらすことはできないからです。

このことを深くイエス様に教えていただきたいものです。私たちは少し小さな困難が来ると不平を言い、つぶやきが出たり、平安を失ってしまいます。

主なる神は、私たちのうちに御座を定められてから、一つの目的を持って働き続けておられます。それは、器の中にある永遠のいのち、つまり内なる人が、自由に外に現われていくために、外なる人が壊されていくようになることです。土の器の中に持っている宝が、外に現わされていかなければなりません。

こんにち差し迫って必要なのは、器ではなく、外に溢れ流れていく「主のいのち」です。また、この世が求めているものも、器ではなく、「真理の光」です。

パウロは、コリントにいる兄弟姉妹に、次のように書くことができたのです。
コリント人への手紙・第二 4章6節

「光が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。

しかし外なる人に死に、内なる人に生きることは、悩みを通してのみ可能となるのです。もし私たちが本当に主に仕え、他の人に祝福をもたらそうと願うなら、「自我のいのち」を捨てなければなりません。

マタイの福音書 10章38節、39節

「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとしませぬ。」

主イエス様の救いにあずかった兄弟姉妹が、自分に対する主のみこころが何であるかを知らないということは、大きな悲劇です。私たちは、私たちに対する主のご目的を深く知りたいものです。

私たちの心の目が主のご目的に対して開かれるなら、今までのいろいろな問題、悩み、苦しみは、私たちを通して内に住んでおられるイエス様が現われるためであったことが分かります。私たちの過去に起こった出来事で無駄は一つもありません。イエス様は最善の道を歩ませてくださいます。どんなに苦しいときも、(先が見えず、希望を失いそうになっ

た時も) イエス様はどのような時にも、最善を成してくださっているのです。

これらの全てのことはただ一つ、イエス様は栄え、私が衰えるためになされてきました。イエス様の霊が私たちのうちで自由を得るために、外なる人は砕かれなければなりません。主イエス様は、この目的を目指して私たちを導いておいでになります。

その導きは、一人一人違います。ある人には早く、ある人には遅く、主は働かれます。ほとんどの場合、自分がゼロとなり、自分の心の中心に、イエス様が「主」となってくださるまでには、長い時間がかかります。私たちは、心のうちに主のご支配を妨げるものを持っていますので、主は前へ導くことがおできになれないのです。

まだ主に捧げていないものを心のうちに持っているなら、今日、それを主にお捧げしましょう。

「イエス様。あなたのために、兄弟姉妹のために、また、あなたを知らない人たちのために、私は全てをあなたに捧げます。あなたが私のうちに、私を通して外に現われることがおできになるように、私は私自身をあなたに全てお捧げいたします」と。

全てを今日、主に明け渡したいものです。

私たちは今まで、自分自身に恐れを抱いたことがあるでしょうか。私たちがたとえ救われたとしても、どんな罪をも犯してしまうという可能性が有るということに、気付いたことがあるでしょうか。巨人ゴリアテのような「自我」が、自分の前に立ち塞がり、どうしてもそれに勝つことができず、パウロのように、

ローマ人への手紙 7章24節

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

イエス様は言われました。

ヨハネの福音書 12章25節

「自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保つて永遠のいのちに至るのです。」

自己否定は、自分の権利を捧げることです。自己否定は、自分に抛り頼まないことです。「私の心ではなく、あなたのみこころをなしてください」。これが、イエス様のご生涯の変わらない態度でした。ですから、イエス様から恵みの流れが、いのちの泉が、人々に分け与えられていたのです。

私たちの考え、私たちの感情、私たちの意思全てを、主のご支配の下に置く時、私たちのうちから、いのちの泉が湧き出てくるはずです。私たちの生まれながらの考え、感情、意思は、霊的ではありません。これを御霊のご支配にゆだねる時、初めてそれはみこころにかなうものとなります。それらを主に捧げることにより、霊的なものとなります。

自らの考え、感情、意思を、自分からイエス様に捧げなければ、私たちのうちから「主のいのち」は流れ出ないのです。

大勢の人が一緒にする決心ではなく、一人一人が決心しなければならないのです。「主よ。私は自らに絶望しています。自ら何もすることができません。どうか私を通して、ご自分のみこころをなしてください」と言いたいものです。

アブラハムは、息子イサクを捧げる前に、イシュマエルを捧げたのです。救いにあずかった多くの人たちは、反対のことをしています。イシュマエルを捧げようとせず、イサクだけを捧げます。自らの肉の力で主に仕えようとします。聖めは、罪の解放より、もっと深く大きいものです。それは、自分の意思を主に捧げ、自分の支配をイエス様にゆだねることだからです。

アブラハムは勇気を奮い起こして、自ら出たイシュマエルを荒野に捨てました。その後アブラハムにもたらされた主の祝福は、どんなに大きかったことでしょう。

アブラハムの勝利の生活を私たちも送るために、何をしたら良いのでしょうか。アブラハムと同じように、「自分の最も愛するものを主に捧げる」ことによって、勝利の生活を送ることができます。

ドイツのアイドリッングンの神学校の校長先生であった姉妹は、自分の「生まれながらの性質」を非常に苦しめたことがありました。いつも悪魔に試みられ、「お前は、繰り返し、繰り返し同じ失敗をしている。お前はもう駄目な人間だ」と囁かれたのです。けれどある日、姉妹は一つの夢を見ました。(夢はあまり大切にしないほうがいいと思います。) 夢は夢なのですが、彼女にとって非常に良い経験だったようです。夢の中で遠く離れた十字架を見たのです。「ああ、十字架か」。もう少し近づくと、「あっ！どなたかが架かっている。誰かな?」。びっくりしたのです。自分だったからです。それから悪魔が攻めてきました。この時、十字架につけられた自らを指し示したところ、すでに十字架につけられ、死んでしまっているのだから、攻撃する必要はないと悪魔は逃げ去ってしまったということです。

またある兄弟は、八年間集会から離れていたのですが、帰って来ました。その時の告白は、「私は十字架につけられていなかったのです」と。

十字架を仰ぐと、そこには主イエス様だけでなく私たちの古き人も共にいます。
ローマ人への手紙 6章6節

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

とあります。

どんなに悪魔が攻めて来ても、私たちがこのみことばをもって立ち向かうことが出来ます。イエス様の勝利は完全です。イエス様は私たちの古き人とともに十字架につけられて死んでくださいました。「生きているのはもはや私ではなく、イエス様が私のうちに住んでおられる。悪魔は私たちに対して何の権利も無い。悪魔よ、退け」と言うことができます。

私たちの持っている問題が何であろうと、イエス様の御臨在を深く心に覚えるまで主の御前に静まり、主のご臨在を確信したなら、みことばを開いて、主のみ声を聴きましょう。そうしていくなら、日々、新たなる力と、上からいただく勝利の生活とを送ることができるのです。

「日々新たにされること」とは、何という恵みでしょうか。

了